

## 編集後記

本誌の編集委員が輪番制で編集後記を記載するようになり、内容・主張・ステイタスが多彩となった。何号かを通読戴くと本誌の目標、編集方針、編集方法、査読方法やその経過などが数多く記載されており、各編集委員の一貫した態度がご理解戴けるかと思う。その中で共通因子は表現法に多少の差はあるが、「日本語の最高の雑誌を目指す」大原 毅編集委員長：29巻11号、に代表される内容である。しかし、一方では本誌の欧文化と投稿論文数減少が論議を増していることも事実である。すなわち、大学を中心とした教育機関では、教育・研究・診療が3本柱であるが、自己評価は、教育・診療面には薄く、投稿論文数に厚く扱われており主客転倒している。とくに最近では「impact factor」が魔力を発揮し、教授選考関連で猛威を振っている。残念ながら、邦文雑誌には「impact factor」が与えられていない。指導者も優れた論文(?)は欧文での発表を勧めるため、邦文誌には「空洞化現象」が生じている。もちろん、自分の研究を英文で発表し、世界的な評価を受けることは意義深く、これを否定する考えはない。しかし、実地臨床の場で激務をこなしている消化器外科医が、何時でも手軽に読める邦文の魅力、欧文では表現困難な微妙な手術手技などの伝達法、など利点は多い。「impact factor」至上主義は経済界でも然りであるが、一方では日本的な良さが失われつつある。今後とも本誌を若手外科医の登竜門として活用して戴き、質の高い邦文雑誌を目指すことが、本学会誌の存続意義でもあると考え、編集委員3年目を迎え決意を新たにしている。

さて、第31巻5号は、東風吹く風とともに会員諸氏の手元に届くと思われるが、原著8編、症例報告8編、研究会報告1編を収載した。原著論文比率の増加と学位論文数の増加は、本誌が目指す若手の「登竜門」としての役割を確実に果たしていることを意味している。また、本誌掲載原著論文の中の40歳未満、会員歴3年以上の筆頭著者は、日本消化器外科学会の「国際交流奨励賞」の審査対象となり、受賞者には国際・外国学会における発表に対し幾らかの補助が約束されている。

日本経済の危機とビッグバン到来の中、医学界でも類似現象がみられつつある。今こそこの国を信じ、夢と希望を持ってこの国の発展のため、共に努力したいと切望するものである。（佐治重豊）